

僕のお母さんはとても優しい。ショートカットで眼鏡をかけたお母さんは、少しふっくらした体型で、その見た目のイメージ通りおっとりしていて、ややおつちよこちよいでどこか抜けたところもあるけれど、間違いなくいつでも僕のことを一番に考えてくれて、なによりも僕を大切にしてくれる。

最近でとても印象的だったのは、数か月前の授業参観日のことだ。僕は大好きなお母さんが学校に来るのが嬉しくて、とても張り切っていた。

「お母さん、明日は遅れずに来てよ！僕、お母さんに良いところ見せるために勉強頑張ってるんだから！」

「うん、勿論よ、ともくん♪しっかりオシヤレして、お母さん、ともくんのこと見に行くからね」

「約束だよ！」

ところが授業参観日当日、僕は前のめりで授業に臨んだのだけれど、待てど暮らせどお母さんは全然来ないのだった。そして、いよいよ授業も終盤に差し掛かるうかという、その時。

「あ、あの！樋山知輝（ひやまともき）の教室はここでしょうか！」

ゼエゼエと呼吸を荒げ、汗をダラダラ垂らしたお母さんが、いきなり教室に飛び込んできたのだった。

しかも、前のドアから…。

教室は笑い声に包まれ、僕達母子はクラス中の笑いものになってしまった。授業が終わり、僕はお母さんと二人で帰宅の途についた。

「…ごめんなさい、ともくん。ホントにごめんなさい…何度も行ってる学校のはずなのに…お母さん、道に迷っちゃって…」

「もういいよ…お母さん…」

頑張ってる姿を見てもらえなかったのは残念だし、友達に笑われたのは恥ずかしかったけれど、僕は嬉しかったのだ。

僕のためにそこまで必死になつてくれるお母さんから、僕に対する並々ならぬ愛情が迸っていたからだ…。

※※※

「へへっ、楽しみだな、知輝の家」  
「……………」

学校からの帰り道を歩きながら、僕は若干頭を抱えていた。隣を歩くクラスメイトのせいだ。早乙女隆治くん…。まあ友達といえど友達なんだけれど、正直少々苦手な男の子だった。ガタイが良く、色黒の金髪で、声がデカくて威圧

的な乱暴者……。いわゆるDQNと呼ばれる人種で、ひ弱な眼鏡のもやしっ子である僕とは正反対のタイプといえた。

教室で彼の方から話しかけてきて、怒らせていじめられるのも怖かったのでつかず離れずの間合いで付き合っていたら、それなりに仲良くなり、いよいよ僕の家に行ってみたいということになってしまったのだった。断り切れず、今二人で向かっているというわけだった。

決して悪い人ではないと思うし、こちらにも偏見があるのは承知しているのだけれど、僕は正直困っていたのだった……。

「あれだろ？知輝のことだから、やっぱ立派な豪邸に住んでるんだろ？」

「え、そんなことないよ。普通だよ」

「そんな謙遜すんなって。お前の育ちの良さは普段から滲み出てるんだから。金持ちなのはわかってるって。それから……そうだ。あのお母さ

ん、いるんだろ？あの参観日のMVPの。あはは」

あの日の出来事は、早乙女くんの記憶にも印象的に刻まれているらしい。なんともいえなかった…。

「うん…うちのお母さんは専業主婦だから…いると思うけど…」

「ふふ…会えるのが楽しみだよ…あのお母さんに…にやはは」

「……………」

僕が気がかりな点の一つはそこなのだった。大変失礼だけれど、あんまり早乙女くんのような人を、愛するお母さんに近づけさせたくなかった。僕が見るからにDQNの友達を連れてきて、お母さんが良く思わないのではないかという心配もある。

だが無情にも、その時は訪れてしまう。せめて買い物にでも出て留守であってくれと願っ

たが、それも叶わなかった。

「おかえりなさい、ともくん……え」

玄関までお迎えに来てくれたお母さんは、やはり早乙女くんの風貌に面食らったようで、幽霊でも見たような青ざめた顔で立ち尽くしている。まあ、なにもそこまでショックを受けなくてもいいと思うけど……。

「お母さん、急でごめん。友達連れてきちやっ  
た」

「へへ、どうも～おばさん。はじめまして～な  
はは！」

「は……はじめまして……」

「なんかおやつとかあるかな？せつかく来て  
もらって、なんもなしじゃあ悪いと思うし……」

「……わかった……すぐ用意するわね……じゃあ  
……後で部屋に持っていくから……」

「え？リビングで食べちゃダメなの？俺、知輝  
ん家のリビング、なんとなく興味あんだけど？」

それにちよつとテレビ見たくつてさ。リビングにテレビあるっしょ？」

早乙女くんはとても無遠慮に要望した。こういうところが苦手なのだ。仮にも他人の家なのに、常識がないというかなんというか…。

「…わかった…じゃありビング行こうか…こっちだから」

「わはは！サンキュー！…無理言つてすみませんね、おばさん」

「え？…う…ううん…遠慮しなくていいわよ…早乙女くん…」

「にやはは！ありがとうござ〜まあ〜す♪」

そんな訳で、僕達二人は連れ立って我が家のリビングに向かった。

「……ん？」

なにか違和感を覚えたが、その正体は判然としなかった…。



「あはは！いいね、快適快適！」

俺は、クラスメイトの樋山知輝の家のリビングのソファでくつろいでいた。目の前のローテーブルにはお菓子の山とジュースが並び、テレビからは愉快的なバラエティー番組の再放送が流れている。他人の家だというのに、俺は心底リラックスしていた。なはは！

「……ふふ」

ふとある方向に視線を飛ばす。リビングと隣り合う形になっているダイニングキッチンだ。遮るものもなく、このリビングからダイニングキッチンの全てを見渡せる。知輝の母親が夕食の支度をしていた。目が合う。慌てて彼女は視線を逸らす。どうやら、こちらを気にしている

ようだった…。

『プルプルプルプルピープルプルプルプル  
ー』

珍妙なメロディーがリビングに響く。知輝のスマホに電話がかかってきたのだ。俺にはわかっていた。…だって俺が指示してるんだから♪

「…もしもし…うん…え…今？」

向かいのソファーに腰掛けた知輝が電話に出た。当惑している様子。この反応も、無論想定通りだ。それなりに手間をかけた計画がつつがなく進行し、俺はとても満足だった。

「え…今すぐ返してほしい？…家まで持ってこい？いや…今、ちよつと早乙女くんがウチに来てて…だから、ちよつと…え…うん…いや、わかるけど…うん…でもそれは、そっちが無理矢理貸してやるって…僕は別に借りたいわけじゃなかったのに…うん…わかるけど…でも…そんな…あつ」

電話の相手は強制的に通話を終了したようだった。

「どうしたの？誰から？」

俺は何食わぬ顔で知輝に訊いた。

「うん：安藤くんが：借りてたゲームソフトを：今すぐ家まで持ってきてくれって：僕：別に借りたくなかったのに：無理矢理貸してやるって押し付けられて：それなのに家まで持ってこいだなんて：」

安藤というのは俺の悪友で、まんま俺と同じタイプの人間だ。今回の計画のために数日前から協力してもらって、後日焼肉を奢ることになっている。

「うわあ、災難だな。でも安藤の奴、頭おかしいからな。いうこと聞いとかないと後々大変かも。俺なら大丈夫だから行ってくれば？」

「……でも」

心配そうな知輝。俺を置いて家を出るのがよ

ほど不本意だと見える。

「俺のことなら気にすんなって。ここでテレビ見させてもらってるから。…あ。まさか俺が前のいない隙にこの家でなんか悪さでもするとか疑ってるの？大丈夫だって。大人しくテレビ見てるよ。おばさんもいるんだし、迷惑かけることなんて出来ねえよ」

「いや、別にそんなこと疑ってないけど…うん…じゃあ…悪いけど…ちよつと行ってくるよ。待っててくれる、早乙女くん？」

「オツケーオツケー。大人しくテレビ見て待ってるわ！」

「うん…じゃあちよつと行ってくるね」

知輝は立ち上がった。そして二階の部屋にゲームソフトを取りに行き、そのまま玄関を出ていった。ガチャリと、玄関ドアが閉まる音がする…。

「……………」

それを確認して、俺はまず、リモコンでテレビを消した。その瞬間、ダイニングの知輝の母親がビクツツとしてこちらを見た。

「ふふふ…」

俺は不敵な笑みを彼女に向ける。そしてそのまま立ち上がり、彼女に近づいていく。

知輝はしばらく帰ってこない。戻ってくる細かい時刻も俺は把握している。安藤がゲームソフトに傷がついていると難癖をつけ、知輝を引き留める手筈になっているのだ。

ダイニングまで移動し、知輝の母親の正面に立った。怯えたような様子で、俯いて小刻みに震えている。

改めてまじまじと見る。地味な眼鏡をかけた黒髪ショートカットの四十代前半の女…。普通の専業主婦といった風体…。真面目で気が小さく大人しそうで、そのくせ衣服の下に隠した体は肉感的でムチムチだ…。

俺は彼女に向かって言った。

「おばさん……はじめまして……ふふ」

「はあ……ああ……」

「……自己紹介してよ……わかる……よな？」

「はあ！」

少し強めの俺の声に、彼女は顔を上げた。緊張に満ちた表情だった。口を開いた。その顔に薄く、官能的で破滅的な笑みを滲ませながら……。

「はあ……ああ……ゴクツ……ああ……わ……私は……」

樋山……佐和子……四十二歳……です……ああ……」

「ふふ……なにしてる……人なの？」

「ああ……んっ……さ……早乙女……りゅ……隆治

様の……い……いいなりオナホ奴隷妻一号♪務  
めちやっつてまあ……す☆☆☆☆」

クラスのDQNの

いいなりオナホ奴隷妻だった  
僕の優しいお母さん

犬文庫 021

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等はありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。



ろちゅろちゅろ！」

ははは！なあ知輝、なんでお前の母親、俺とこうしてべろべろちゅぱちゅぱエロエロベロチューしてるんだろうな(笑)？お前が初めて俺を家に連れてきて、今日はじめましてのはずなのに、お前の母親、俺のベロキス全然拒まねえの！それどころか自分から喜んで唾液飛び散らして超激しいベロチューぶっこいでるんだぜ？見てみるよ？あはは！しかもこんな風に愛おしそうに息子のクラスメイトの体にギュツと抱きついてさ♪旦那いるっていうのによ！：知輝のお母さん、ついさっきまで息子がいた家の中で不倫ベロベロチュポチュポベロチュー(笑)♪とんでもねえエロビッチ女だな、お前の母親！ぎやははは！クソウケる！

「べろべろべろべろ！：ふはっ！：よし、いいだろう、まあベロチューはこんなもんで」

「れろれろっ：ああ：んん：はあ：あ：あり

がとう…ごさい…ました…」

口を離し、真っ赤に上気した顔で感謝を述べる知輝の母親。一体なんの感謝なのか。俺と不倫ベロチューさせて頂けたことへの感謝なのか(笑)？

「ふふ…なあ佐和子…まさか息子と一緒に家に来るとは思ってもみなかっただろ？」

「はあ…はい…とても…驚きました…」

これまで佐和子の家で調教したことは一度もなかった。こいつにとっては寝耳に水だったことだろう。

「そのことについて、なんか文句はあるか？」

「いえ、とんでもありません！わたくしのような奴隷が、ご主人様のされることに意見するなんて絶対ございません！」

慌てた様子で断言する佐和子。さすが俺。調教が行き届いている。…でもどうするよ、知輝？お前の母親、息子のクラスメイトに向かつ

てとんでもないこと言ってるぞ(笑)? にやはは！

「…と、いうことは、例えこの家の中であろうと、お前は自らの職責を真摯に果たすということだな？」

「はあんっ！…んん…ああ！はい！仰る通りです！佐和子！ご主人様の奴隷として！例え自宅であろうと務めを果たします！このオナホ奴隷に、なんなりとお申し付けくださいませご主人様！わたくし、ご主人様のご命令ならなんでも致します！」

さすがに躊躇いがあるようだったが、最終的には佐和子は自らを奮い立たせるようにそう言い切った。

「ぬふふ…どんなスケベなことでもするか？」

「ああ…は、はい！どんなスケベなことでも！

ああ、この家の中で…ゴクツ…どんなスケベなことでも、どんなドスケベなことでも、ご主人

様のご命令とあらば、喜んでさせて頂きます！」

眼鏡をかけた四十代の真面目主婦が、えげつないことを口走っている。…あ、やべ。チンポ勃ってきちまった♪

「なはは、いいねえ…あ、っていうかお前、知輝の前で俺がまだ名前言っていないのに『早乙女くん』って呼んだだろ？今日初めて会った設定なのに」

「あ…も、申し訳ございません！」

「もし知輝に俺達の関係がバレたらどうするんだよ！シヤレになんねえだろうが！わかつてんのか！この低能ドアホクソババア！」

「はあ！申し訳ありません！申し訳ありません！本当に申し訳ありません！どうかお許してください！ご主人様！」

わざとちよつとキツク言うと、悲しいくらいに頭を深く下げて全力で謝罪するクラスメイトの母親。このババア、マジでおもしれえ♪

「いや、ダメだ。許さん。これは『しつけ』だな。ビンタするから気をつけて立て」

「はい！わかりました！」

エプロン姿の知輝の母は、なんの疑問も差し挟まず言われた通り姿勢を正して立った。衝撃で倒れないよう、ぐつと下半身に力を込めているのがわかる。

さあ皆さん、奴隷という存在がいかなるものなのか、とくにご覧頂きましょう。俺は目の前のババアの左頬を、全く遠慮なく、思いつ切り右の掌で張り上げた。

パァーンッ！と、破裂音に近い甲高い響きだが、家族の平穏を司るはずのダイニングにこだまする。

「ぐっ…」

佐和子は歯を食いしばって鋭い痛みに耐えている。俺は一発ビンタしたことで嗜虐心を刺激され、そこから狂ったように連発で平手を放

っていった。

「ああっ！おら！おら！おらおらおらおらおらおらおつらあああ！」

パアンツ！パアンツ！パアンツ！パアンツ！パアンツ！パアンツ！パアンツ！パアンツ！

「んんっ！ぬっ！あっ！んんんっ！きやつ！ん…なああああん！」

クラスメイトの母親の頬に、ビンタ十連発…。さすがに痛みには耐えかねて、佐和子の口から苦悶の叫びが漏れる。だが彼女は抵抗したり反駁したりは一切しない。言われるがまま、マネキンのように直立不動で、息子のクラスメイトに頬を強かにぶたれている。

ホント…：ウケるだろ(笑)？

「はあ…ああ…：おら、俺に言わなきやいけな  
いことがあるだろ？ちゃんと見えや！」

腕を下ろした俺に、佐和子は恭しく頭を垂れ

る。

「はあ…ああ…はい…ああ、ご主人様！『しつ  
け』…ありがとうございます！しつけて頂いて  
とっても嬉しいです！心から感謝致します！」  
頬をビンタされまくって感謝する母親の凶

(笑)♪マジ狂ってるね♪

「馬鹿野郎！アホかお前は！こんなもんで『し  
つけ』が終わりなわけねえだろうが！まだまだ  
これからなんだよ！早とちりしやがって！こ  
の早漏マン汁お漏らしババアが！お前だつて  
もつとしつけてほしいだろ！」

「ああ…は…はい！もつとしつけてほしいで  
す！しつけてください！もつともつと『しつけ』  
してください！ご主人様！」

「はは！いいだろう！じゃあ今すぐすっぽん  
ぽんになれ！」

「え…」

我が家のダイニングで脱衣することへの抵